

六条御息所再論

— 死靈事件を中心に —

武原弘

「若菜下」巻の半ば、光源氏栄華の極みにおいて、女三宮の密通、紫上の発病そして危篤のことなど、物語は六条院のあいづぐ不穩事を語り起こす。ここに六条御息所の死靈出現という怪事を重ね、場面は前後にいつそう緊迫して展開することになる。ただし、源氏物語第二部のクライマックスと読まれよう。

六条御息所は、かつて物語第一部「葵」巻において、生きながらにして怨霊と化し、葵上にとり憑いてこれを死に至らしめた人物である。御息所像の根基を決定づけたこの生靈事件については、すでに小論を成したことがあるので、いまはくり返し述べないが、その要点について若干の覚え書きを施しておきたい。すなわち、一般的には御霊信仰、家霊問題に結びつけられることの多い「物の怪」現象を、ここでは徹底的に個化し、しかもそれを憑く側の主体の内面に即して語るといふ独自の方法によって形象化していること。ここでの「物の怪」が、怨言と聞くに当らぬ、あまりに人間的な哀訴嘆息の詞を口ばしるところから、御息所の抑制し難い嫉妬心の深層を

追求する物語作者は、理性を超える女の妄念のしたたかき、「もの思ひにあくがるなる魂」（葵、(2)―二九）を嘆き暮らす平安朝貴族女性の深い懊惱に共感し、ひいては彼女たちが己れの現実として生きぬかなくてはならない一夫多妻制社会の欺瞞と矛盾を、その根源から批判したこと。「物の怪」が源氏一人の目に現象する描写態には、その正体を「心の鬼」とする式部の物の怪観が確実に投影していること、などが留意された。

さて、論点を当面の御息所死靈問題に戻す。かつて池田亀鑑氏は、御息所が遠く死後にまで及ぶ長篇的存在となっている点について、何ら「必然性が見出せない」として、六条御息所物語の構想の「破綻」を論断された。が、この物語における「物の怪」の主題的意義を重視する多屋頼俊氏、西郷信綱氏らによって池田説は強く批判され、近時ではさらに積極的な御息所死靈有意論が重ねられてきている。その二、三について所論を瞥見すると、まず森一郎氏は、さきの多屋説の要旨を踏まえつつ、「御息所が源氏の女性遍歴における罪障意識の、始原と現在」を占めている」と説かれる。御息所死靈事件を「怪異の問題ではなく構想の問題」とする大朝雄二氏は

さらにそれが「源氏の運命への顕現へ」と「物語の主題の形成展開にまで喰い込んでいる」文脈をも緻密に分析された。また、深沢三

千男氏によると、第二部における御息所の死霊は、紫上や女三宮の

それぞれの状況、「物思わしき女の内面」こそが「良導体」となつて誘ひ寄せられたのだと解かれる。

とりつかれる側の肉体的ないし精神的違和が、内的必然性の周到な発展の上に行き着くところまで行き着いた時、そして憂い

を知らなかった女が物恨めしく、物思わしき女の内質を備えるに至つた時、初めて何らかのきっかけを得てもものけが発動するに至つていふようである。(中略)だからものけの問題は

御息所死霊事件の主題性を、憑かれる側の女たちの内面の問題として追求する氏の視座は、きわめて示唆的であると学べよう。

こうしたすぐれた諸論考によつて、御息所死霊事件についての主題論上、構想論上の解明はすでに尽くされたとも考えることができるのであるが、六条院崩壊への危機を物語るに、唐突に死者の再生をもつてする作者の思想とはなにか、それがいまなぜ六条御息所なのかなどの問題は、なお追考の余地を残しているのではなからうか。とりわけ、その死霊出現の場面が、紫上や女三宮の出家問題と前後に深く絡む文脈の裡におかれていた点には注意が肝要で、さきの深沢論文において触れるところはあるが、小論ではこれを重視し、中心的課題としてあらためて再検討してみたいのである。

二

まず、紫上の場合についての考察からはじめる。物語をさかのぼつて、死霊出現事件以前の紫上における問題状況を読みおさえておきたい。なぜなら、一見あまりに唐突な御息所の死霊出現ではあるが、憑かれる側の状況として、霊を招来するに足る肉体的精神的条件下にあつたとする諸論は根拠を有し、小論においても、その状況論理は生きるものだからである。

「若菜上」巻始発部で語られる女三宮降嫁のことは、紫上に烈しい衝撃を与えた。以来、強靱な意志と無類の自己謙抑によつて、紫上は六条院の円満な秩序と調和を維持するのであるが、内界に刻む不安と苦悩は深甚で、やがて切実な思いで出家を願うようになる。

今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをも、となむ思ふ。この世はかばかりと、見はてつる心地する齡にもなりにけり。(若菜下、(4)―159)

六条院を「かうおほぞうの住まひ」と呼び、そこでの源氏との愛情生活を「この世はかばかり」と諦念するところに、彼女の内なる絶望の深さが表わされている。もとより、源氏はこの志願を許さな

い。
みづから深き本意ある事なれど、とまりてさうさうしくおほえたまひ、ある世に交らむ御ありさまのうしろめたさによりこそ、ながらふれ。つひにその事遂げなむ後に、ともかくも思しなれ。(同)

出家は源氏自身の念願でもあるが、後に残る紫上のが気がかりなので延期している。自分より先の出家は許可できない、と源氏はいう。紫上に対する強い愛執が表白されている。

紫上は、この後も再三にわたって出家を願ひ出る。彼女の心底には、源氏に対するぬきがない不信感が根を張っていったのである。

あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、さらむ世を思はてぬさきに心と背きにしがな。(若菜下、(4)―一六九)

外面には無上の榮華を誇つていても、内面において、日々「心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふ」(同、一九九)紫上は、切願する。

まめやかにには、いと行く先少なき心地するを、今年もかく知らず顔にて過ぐすは、いとうしろめたくこそ。さきさきも聞こゆること、いかで御ゆるしあらば。(若菜下、(4)―一九九)

彼女は三十七才の重厄を迎えていた。またも源氏の不許可にあつて本懐は遂げられないまま、「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身」(同、(4)―二〇三)を嘆きつつ、やがて発病するに至る。容態は一進一退を続け、徐々に悪化ののち、にわかに重態となる。御息所の死霊は、この機をのがさなかつた。そして、一時的にもせよ、紫上を絶命状態に陥れ、源氏に対し怨恨とも愁嘆ともつかぬ妄言を吐くのである。その内容上の問題性については、後述に譲りたい。

私はここで、紫上におけるこうした問題状況についてとくに留意される要点を確認した上で、さらに考察をすすめることにする。

「物の怪」は、つねに相手の肉体的な弱み、精神的な不安定につけ

こんでとり憑く。見てきたごとく、紫上におけるそうした、物思わしき、(深沢氏)状況は物語に十分の描写を得て、その意味においてここでの死霊出現は必ずしも唐突ではないのかも知れない。そのなかで、紫上が多年の念願とする出家を遂に果せず、不本意ながらの齡を重ねる身であつたことも、御息所の死霊を呼び招く見過ごせない要因として注目されるのである。紫上はなぜ出家することができなかつたのか。それをあくまで許さない源氏の紫上に対する強い愛執の故には相違ないとして、そこから離脱しないまま、いつまでも源氏との愛情生活が続ける紫上自身の罪障も、そこにはあつたのである。すなわち、不出家それ自体が罪なのである。紫上がそのことに気づくのは、彼女の最晩年、後の「御法」巻においてである。病状がさらに悪化して、いよいよ死期の近いことを予感した紫上は、重ねて最後の出家志願を訴えるが、やはり源氏は許さない。他に何の不満はないものの、出家不許可のことだけは源氏が恨めしく、さらには

わが御身をも、罪軽かるまじきにやと、うしろめたく思されけり。(御法、(4)―四八一)

と、紫上自身の罪障深さにも思いをいたすのである。

それにしても、紫上の罪障深かさとはいかなるものか、いま少し厳密に問いかえしておく必要がある。なぜなら、彼女はこれまで、物語に一貫して理想の女性像としての造型を与えられ、作中世界において源氏の愛を一身に受け、世にあまねく人々の称賛敬慕を集めた人物で、「あり難き人の御りさま」は「まことにたぐひあらじ」と見られ(若菜下、(4)―一九六)、「仏神にもこの御心

ばせのあり難く罪軽きさまを申しあきらめ」(同、(4)―二〇七)られる人格の持ち主でもあったからである。そのような紫上の身にとってさき難い罪障の一つが、源氏に対する深い愛執であったことについては、さきに触れた。それと不可分のものではあるが、彼女がそれと意識することのなかった、より重大ないま一つの罪障が根深く存在していたと考えることができるのである。それは、端的に、女三宮の降嫁以来地すべりをはじめた紫上の社会的地位——源氏の正妻、あるいは六条院の女主人としての立場、さらにはそれによって保証されている彼女の現実的幸福への執着といつてよい。紫上の内界における苦悩の実体は、一面においてこのように捉えられる。そして、その執着から脱却しようとする思いが、彼女の出家願望なのである。紫上の思考過程に即してこの間の問題状況を精確に分析された阿部秋生氏の論述を借りるならば、

わが身にまよつてゐる社会的な衣裳を一枚一枚ひきはがして、わが身を裸にして、裸のわが身の社会的位置づけをするといふ仕事は、誇りとか、対面とかを容易に拭ひ棄てることができないうつかりそれを棄てると、六条院の女主人といふ社会的地位までも一緒に棄ててしまふおそれもあるだけに、非常な苦痛を伴ひ、大きな勇気が必要とした。(中略) 齒もたたぬはずであった女三の宮のことがあつたにも関わらず、どうにか六条院の愛情と六条院の女主人といふ地位とを實質的に確保しえた現在が、敗け犬とならずに舞台を引退しうる最後の機会である——「出家したい」と紫の上がいつたことの背後には、こんな思考の跡があつたのではなからうか。

と考えることができる。ついで多くを学びたい。

人間的にはあらゆる美質を具えた理想の紫上であつても、仏道よりこれを見れば罪障深き女人でしかない、と作者は語るのであらうか。顧みるに、紫上の出家志願は、その動機において不純といえなくもない。作中において源氏や明石の君の口を通して語られる出家観(御法、(4)―四八〇)幻、(4)―五二〇)は、現世に対する執着心を完全に滅却した後に行うべき厳格さを強調するもので、それは理想ではあつても実行は不可能に近い。紫上がその終末の日に至るまで遂に出家を遂げられなかつたのは、宗教については厳格に理想の高さを、人間現実についてはその存在の根底にまで巢喰う罪障の深さを見つめる物語作者が、その回復しがたい隔絶に苦悩し絶望する他ない自身の生を形象しているのであらう。ともあれ、紫上における不出家は、彼女の人間現実の罪の状況を示唆するものと解して不当ではあるまい。

以上はいくばくかの迂回ではあるが、私は再び御息所死霊事件論にたち返ることができる。私見によると、件の「物の怪」は、他界後もお救われぬ罪業の化身として、紫上の身にも深い罪障への親和力に感応して出現したものと考える。すなわち、六条院の生活や源氏への愛執を棄てきれないまま、ただ現実苦からの逃避のために出家を望む紫上の生のあり方に、御息所はかつての己れ自身の罪深い生を重ね見、所詮は救われ難い女の宿業を共感した。同時にまた、共に身に負う罪障深きでありながら源氏の愛憎を別することへの嫉妬・怨念は、矛盾はするが、「物の怪」の本性に必然なのでもある。ここでの憑霊のそもそもの契機は、夫婦の睦言のなかで源氏

が過去の女性を評した際、御息所を回想しあしざまに評してその嫉妬を買ったことにあり、死霊は怨言のなかでそれを強調し、

思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いとうちめしく、(下略)(若菜下、(4)一二七)

と言っている。死霊はまた、妄執ゆえに成仏し得ない苦しみを訴え、

よし、今は、この罪軽むばかりのわざをせさせたまへ。(中略)齋宮におはしましころほひの御罪軽むべからむ功德のこ

とを、必ずせさせたまへ。(同、(4)一二八)

と、魂の究極の救済を求める。この文脈について、彼女の霊にも滅罪して究極の救いを求めたい願望はひそんでいたのだ。紫上の偏執的なままに執拗な出家の願いは、ほかならぬ苦しみに悶える、救われざる御息所の魂それ自身の願いでもあったのではないか。

との解説を加える深沢氏(金忠)の読みは正当であろう。ただし、前述したごとく、紫上の出家願望には罪障につながる問題性が内在しており、御息所の死霊はまさにその弱目につけ込んでとり憑いたとも考へることができるので、ここで憑く者と憑かれる者の関係は、怨恨と同時に同病相哀れむ、屈折した関係となっている。「物の怪」が、「この人を、深く憎しと思ひきこゆることはなければ」と(若菜下、(4)一二八)と言いながら、同時に紫上を苦しめさいなむところに、そうした矛盾関係が現象している。そして、ひつきょう、御息所の死霊出現は、出家によって救済を得ようとする紫上を嫉妬

六条御息所再論 — 死霊事件を中心に —

し、それを阻止妨害するものであった。この憑霊事件によって、物語の作者は、女人にとつて出家による究極の救済がいかに遠く、不確かなものであるかを語ろうとしているのではないだろうか。この場面の直後で、紫上は五戒を受け、仏事を営んで、罪障滅却につとめるが、それによって真実の救済が得られていないことは、彼女の身におも「物の怪」が離れ去っていない状況(若菜下、(4)一二三三)を読んで、つぶさに了解されるとおりである。

三

六条御息所の死霊は、「柏木」巻において再び現われ、女三宮に憑いて苦しめる。ここでも「物の怪」の唐突さは前回と同様であるが、その出現を可能ならしめる物語状況において、女三宮の出家問題が占める比重はまたも軽微ではなく、留意が必要と考えられる。本文に即して、その過程をたどってみたい。

やや先んじて惹起した柏木との密通事件は、女三宮にとつても深刻な悲劇への端緒となった。二人は犯した罪の重大さに恐れおののき、深い苦悩を抱えて憂悶する。女三宮は、

まはゆく恥しく思さるれば、明き所にだにえらざり出でたまはず。いと口惜しき身なりけり、とみづから思し知るべし。(中略)人知れず、涙ぐましく思さる。(若菜下、(4)一二三二～二三三)

と怯え、さらには

あやしかりし事を思し嘆きしより、やがて例のさまにもおはせず悩ましくしたまへど、(下略)(同、(4)一二三四)

と、病いがちとなる。

立ちぬる月より物聞こしめさで、いたく青みそこなはれたまふ。(同)

女三宮は、この時すでに懐妊していたのである。悪阻の苦しみも加わって病状ますます芳しくないころ、宮の失態により柏木からの艶書が源氏に発見されるという事件があり、状況はきわめて深刻であった。やがて、苦悶の極みのなかで男子を産出した女三宮は、産養の盛儀をよそに、源氏に出家を願ひ出る。

なほ、え生きたるまじき心地なむしはべるを、かかる人は罪も重かなり。尼になりて、もしそれにや生きとまると試み、また亡くなるとも、罪を失ふことにもやとなん思ひはべる。(柏木、(4)―二九一)

これまでの、若く幼い女三宮の言葉とも思えない。思量に富む、主体的決断の表明である。宮の決意は固く、その病気を案じて急遽下山した朱雀院に対しても、宮は

生くべうもおぼえはべらぬを、かくおはしまいたるついでに、尼になさせたまひてよ。(柏木、(4)―二九五)

と泣訴する。諫止しつづためらう源氏を振りきるように、院はついに宮の出家を断行するのであるが、この直後、突如「物の怪」が出現し、宮に憑いた六条御息所の死霊がその正体をあらわにする。かねて、宮の突然の発心は「物の怪」にとり憑かれての故と思索した源氏にとって、御息所の怨霊の執念深かさがあらためて思い知らされたのである(柏木、(4)―三〇〇)。

ストーリーをなぞるのはこれまでとし、当面する問題点の考察へ

と論をすすめたい。見てきたごとく、物語における女三宮の罪の状況はすでに明らかである。宮自身、犯した過失の重大さを知り、罪の意識におののいたことも、すでに触れておいた。「御心の鬼」(良心の苛責)(若菜下、(4)―二三六)にさいなまれ続けたのもその故である。しかしながら、宮のそうした罪責感が、人間存在の根底にぬきがたい、魂の深みにおいて救済されるべき罪障の意識にどれほど深く関わるものであったかは、きわめて疑問とされなくてはならない。なぜなら、宮が恐れおののくのは、事件の発覚であり、あるいは源氏の怒りであって、己れの宿世に対する深い反省からは読まれないからである。もともと、柏木との密通が女三宮自ら心を通わせてする情交ではなく、柏木の一方的な激情の風によって宮の身にもたらされたものであった。「深き心もおはせねど、ひたおもむきにも怖ぢしたまへる御心」(若菜下、(4)―二二二)の宮が、それによつて罪障意識を抱懐するには理不尽に過ぎる過失であったともいえる。とはいえ、思慮の浅さが招いた罪の状況は、否み難い事実である。御息所の死霊は、宮の出産という肉体的弱目を直接の契機としつづ、そのような罪過ある状況——とりわけ深刻な内面苦惱にこそとり憑いて現われたのである。その軌は、前節において述べた紫上の場合と、まったく同一である。

私がかここでとくに考えたいのは、御息所の死霊は、なぜずでに出家を遂げた身の女三宮にとり憑くことができたのか、物語世界においてもつその意味は何か、という問題である。あらためて、その「物の怪」出現の場面に注目してみよう。この時死霊は、短いながら不気味な怨言を吐き、笑いながら去ってゆく。

「いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いと妬かりしかば、このわたりさりげなくてなん日ごろさぶらひつる。今は帰りなん」とてうち笑ふ。(柏木、(4)―三〇〇)

前半部はかつて紫上が蘇生したことを口惜しがつての科白(若菜下、(4)―二三三)、後半部は女三宮のことであるが、「日ごろさぶらひつる」とは宮が出家を志願した折、すでにとり憑いて悪事を働いていたことを白状したものである。すなわち、宮の出家は「物の怪」のしわざであることを確認するものである。さきにも触れるところがあつたが、源氏にははやく、「邪気なんどの人の心たぶろかして、かかる方にてすすむるやうもはべるたるを」(柏木、(4)―二九六)と察するところがあつたが、それを意に介さない朱雀院におしきられて、受戒のことがとり行われた。「物の怪」の側からすれば、宮に憑いて現われた所期の目的は達せられたわけで、藤井貞和氏の解説に従うと、

女三宮を、死霊の世界へ拉致することができないまでも、いわば死の予行としての出家の途へ踏みこませることに、どうにか(まんど、というべきか——)成功した。

ことになる。ここで「物の怪」が「今は帰りなんとてうち笑ふ」のは、「辞去に際して凱歌をあげているのだ」とも、氏は説かれる。ところで、さきに紫上にとり憑いてその出家を妨げた六条御息所の死霊が、今度は女三宮の出家を促し、遂行に至らしめる所業に出るとはいかにしたことか。いったい、罪障の権化である「物の怪」に導かれてする出家とは、そもそも何か。あるいは、何でありうるのか。もちろん、御息所の死霊による女三宮の出家が、この時誕生

六条御息所再論 — 死霊事件を中心に —

した薫ほか周囲の諸人物の死生とも連動しつと、とりわけ源氏の運命の顕現に深く関わつて物語の構想をつき動かす、主題にも喰ひこむものであることは、大朝雄二氏の論考に詳しく学べるし、六条院の繁栄と崩壊の二事に相渉つて、御息所の死霊が守護霊としての側面と怨霊としての側面とを兼ね備えたものであることは、藤井氏説によつて示唆を受けることができる。ただ、女三宮その人に注意を向けてその出家問題を考えてみると、死霊の祟りが魂の救済として作用するここでの憑霊現象は、一見不可解なものとなる。ことがらの本質は、おそらく、そのような物語の表層にあるのではあるまい。

結論的な述べ方になるが、女三宮の出家は、魂の究極の救済を願つてする本来的なそれには遠く及ばず、本格的なものではない。宮の罪責感が本質的な意味で宗教的なものでない点については、さきに触れたので再説しないが、第二の問題点として、後の源氏や夕霧の目を通して、宮の出家の唐突さ、不自然さは問題視されている。まず、宮の尼姿は源氏の目につくさう美しく、

かくてしようつくしき子どもの心地して、なまめかしうをかしげなり。(柏木、(4)―三一一)

と映る。宮に対するいまさらの源氏の未練を叙したものであるが、同時にあまりに若い宮の、早すぎる出家を強調したい作者の意図もここにはこめられていよう。これよりはるか後の巻「匂宮」に、成長する薫が自身の出生について懷疑するとき、「宮もかくさかりの御容貌をやつしたまひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむきたまひけん(匂宮、(5)―一八)と訝るが、これらの文脈は前後

に重なったものと読まれる。また、夕霧にとつても、当初から不審な宮のにわかな出家であった。

女宮のかく世を背きたまへるありさま、おどろおどろしき御悩みにあらで、すがやかに思ひたぢけるほどよ。(柏木、(4)―三二五)

密通事件を知らない夕霧にとつては、そうした不審の思ひは当然だつたとして、それほど不自然な宮の出家の問題性を描出する作者の表現態として注意されるのである。

第三の問題点。女三宮は、誕生したばかりの薫を捨ておいて、逃げるように仏道に入るのであるが、源氏はそのことを鋭く問う。

この人をばいかが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂。(同、(4)―三一四)

「あはれなり」(同)と、源氏は同情も寄せているが、宮の利己的かつ逃避的な出家は本来の入道精神に適うものでないと作者の意図が、ここには仮託されてはいないか。

トータルな評価として、女三宮の出家は自己中心的で、安易に過ぎるものといえよう。物語作者の出家観は、もつと厳しく、理想的なレベルにあつた。源氏の出家観として、

一たび家を出でたまひなば、仮にもこの世をかへりみんと思しおきてず。(中略)同じ山なりとも、峰を隔ててあひ見たて

まつらぬ住み処にかけ離れなことをのみ思しまうけたるに、(下略)(御法、四八〇)

と語られるところが、作者のそれに一致している。このような厳格さを忘れてする安易な出家を、作者は「うちあさへたる思ひのま

まの道心」(同)といっている。さらに後、明石君の弁を通して語られる出家観

つひに澄みはてさせたまふ方深うはべらひと、思ひやられてこそ。いにしへの例などを聞きはべるについても、心におどろかれ、思ふより違ふふしありて、世を厭ふついでになるとか、それはなほわるき事とこそ。(幻、(4)―五二〇)

も、作者自身のものと考えられてよい。顧みるに、さきの女三宮の出家こそ、「うちあさへたる」「わるき」実例と回想されているのではないか。読まれるとおり、あれほどまで多年にわたる切願を果しえなかつた紫上の不出家以上に、女三宮の「なかなか山水の住み処濁りぬべく」「あさへたる」(御法、(4)―四八〇)出家こそ、罪障により近いものと考えられているのである。

このように見てくれば、「物の怪」によって引きこまれた女三宮の出家が、救済にはほど遠い、むしろ無明の道でしかないことが了解され、それに気づかない宮を死霊は声高らかに嘲笑して去つたことも理解されてくる。つまるところ、女三宮の出家に非救済を讀みとり、そこに眞の救済のいかにも難い女人の罪障深かさを語ろうとする作者の思想を看取するのが、本節の主旨なのである。

四

生前に出家を遂げた六条御息所ではあつたが、死後なお冥界をさ迷い、あるいは

御身の苦しうなりたまふらむありさま、いかなる煙の中にまだひたまふらん。(鈴虫、(4)―三七六)

とする墮獄の苦しみから救われていない。秋好中宮はこのことを深く悲しみ、自らも出家を切願して源氏に訴えた。

亡き人の御ありさまの罪軽からぬさまにはの聞くことのはべりしを、(中略)いかで、よう言ひ聞かせん人の勧めをも聞きはべりて、みづからだにかの炎をも冷ましはべりしがなと、(下略) (鈴虫、(4)―三七六―三七七)

源氏は、これを諫めて語る。

その炎なむ、誰ものがるまじきことと知りながら、朝露のかかれるほどは思ひ葉はべらぬになむ。(中略)やうやうさる御心ざしをしめたまひて、かの御煙はるくべき事をせさせたまへ。

しか思ひたまふことはべりながら、もの騒がしきやうに、静かなる本意もなきやうになるありさまに、明け暮らしはべりつ、(下略) (鈴虫、(4)―三七七)

人間存在の罪深きは、一人六条御息所だけのものではない。さりとて、出家しさえすればたやすく救われるというものでもないのだから、俗世に身を処しつつ少しでも罪業を軽めるべく功德を行って生き続けるほかはないのだ、という。「世の中なべてはかなく厭ひ棄てまほしきことを聞えかはしたまへど、なほやつしにくき御身のありさま」(同、(4)―三七八)は、源氏も中宮もまったく変らない罪の状況のただ中にある。いわば、罪に処して罪障を滅却せんとして生き続けることこそ、人間の真実に近いとする思想なのである。これを、物語作者紫式部の人間存在に対する認識、その救済観の表白と読んで、おそらく不当なのではあるまい。『紫式部日記』中にも、出家に対する作者の強い願望に併せて、

六条御息所再論 ― 死霊事件を中心に ―

世のいとほしきことは、すべつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべらず、ただひたみちにそむきても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむはべるべかなる。それに、やすらひはべるなり。(中略)それ、罪ふかき人は、またかならずしもかなひはべらじ。さきの世しらるることのみおほうはべれば、よろづにつけてぞ悲しくはべる。(日本古典文学全集本、二四六)

と、自己の罪障深さに対する深い認識、救済の難さを嘆く不安の心情が述べられている。そしてさらに、私見によれば、安易な出家に対する懐疑、批判の趣きさえここには読みとれるのではあるまいか。この意味において、物語と日記を分けつつ、文脈は確かに通底しているのである。秋好中宮の心あつい追善供養によって(鈴虫、(4)―三七九)、六条御息所の魂は鎮められ、以降の物語においてその死霊が三たび出現することはない。

以上、六条御息所の死霊問題を中心として、この物語における出家の思想のありようについて小考を試みた。みてきたように、その「物の怪」は、物語の主題や構想と深く関わりつつ、文学形象としていかに生き生きとした、また確かな実在であった。斎藤暁子氏の卓説のとおり、

この物語の世界は生者だけで構成されているのではない。死者も又登場人物である。生者の世界は死者の世界と隣接し、死者はしばしば生者の世界を訪れる。死者はへんな言い方だが皆生きています。

と了解されてよい。そのような独自の方法によって、物語作者は人

間存在の深みからその罪と救済の問題を問いなおし、追求し続けたのである。この物語は、まさしく、死者の驕りを描いてすぐれた達成を果した傑作、と呼ぶにふさわしかろう。

注13 注11に同じ。
注14 齋藤暁子氏「源氏物語の死者創造（その二）」（紫式部学会編『ちんさき』第二〇輯、昭58所収）

注1 拙稿「六条御息所造型の方法について——生霊事件を中心に——」（梅光女学院大学「日本文学研究」第二一号）

なお、本文の引用は小学館刊「日本古典文学全集源氏物語」によった。

注2 池田亀鑑氏「源氏物語の構成とその技法」（「望郷」第八号、昭24・6）

注3 多屋頼俊氏「源氏物語の思想」昭27刊。

注4 西郷信綱氏「詩の発生」昭35刊。

注5 森一郎氏「六条御息所の造型——その役割と問題——」（「源氏物語作中人物論」昭54刊所収）

注6 大朝雄二氏「源氏物語正篇の研究」昭50刊所収の第十七章及び第十八章。

注7 深沢三千男氏「六条御息所悪霊事件の主題性について」（紫式部学会編「源氏物語とその影響」古代文学論叢第六輯、昭53刊所収）

注8 注7に同じ。

注9 阿部秋生「六条院の述懐」白（東京大学人文科学科紀要第三九輯、昭41・12）

注10 注7に同じ。

注11 藤井貞和氏「六条御息所の物の怪」（秋山虔・清水好子両氏編『講座源氏物語の世界』第七集 昭57刊所収）

注12 注6に同じ。